

ビブリオエッセー

産経新聞 令和2年(2020年)10月5日(月)

大阪府東大阪市 西望愛 (19)

【旅猫リポート】

有川浩(講談社文庫)

2020.10.5

ふと訪れた書店でこの本を手にとったのは、3年ほど前のことだった。ちょうどその頃、友人から1匹の捨て猫を譲り受け、以前より猫という動物に興味を持ち始めていたから。そんな単純な理由でこの本を選んだ。

物語は1匹の野良猫とサトルの出会いから始まる。雄猫なのに「ナナ」と名づけられた。サトルは無類の猫好きで、このツンデレ猫に気に入られようとするのだが、当時の自分の状況と少しだけ重なったこともあり、私はすぐに本の世界へのめり込んだ。申し分ないルームメイトだったふたりの5年。が、読み進めて、啞然とした。

「ナナ、ごめん」。わずか数ページでサトルはナナの新しい飼い主を探し始めたのである。私はこの時、少しだけサトルに失望した。あまりに無責任ではないか。だがさらに読み進めていくと、その理由が明らかになる。

父の写真館を継いだコースケ、ペットと泊まれるペンションを経営するスギとチカコ。昔の同級生を訪ねてワゴン車で、ふたりだけの旅が始まる。みんな30代、それぞれの人生を歩んできた友人たちのことを知り、でも飼い主はなかなか見つからない。

最後にたどり着いたのは……。サトルにはある秘密があった。私は感動と同時に、猫と人間の間にも絆が生まれることに感銘を受けた。

サトルとナナは会話し、信頼し合っていた。映画では高畑充希さんのしゃべるナナが印象的だったが、単にフィクションとは思えない。

現実でも猫と信頼関係を築くことはできるはずだ。この本を読んで、今はそう思っている。

「天才」志村どうぶつ園のハイジさんのような特殊能力は持っていない。だけど私は今日も、うちの猫としっかり「会話」している。

サトルとナナ、幸せのゆくえ

※無断転載不可